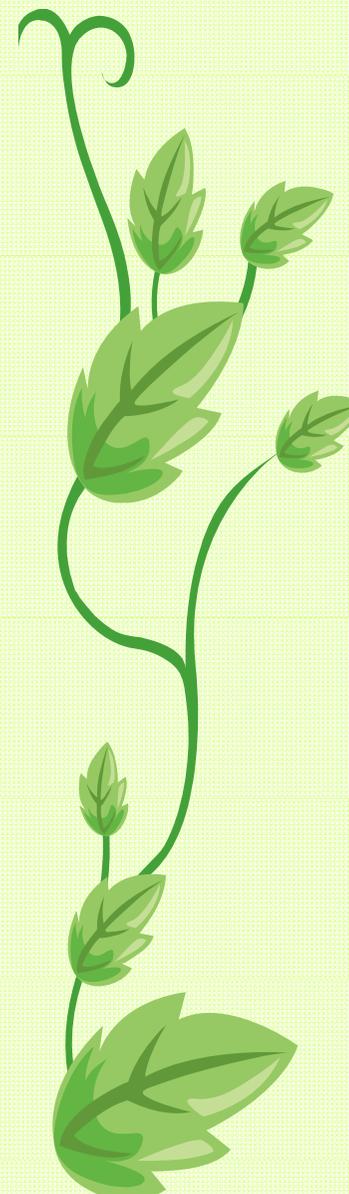


日本語教育における会話データ分析の社会的貢献の
可能性を考える

— 研究の時代的変遷の調査をもとに —

調査報告④
(接触場面研究)

宮崎七湖
早稲田大学

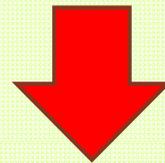


1. はじめに (④接触場面研究)

- なぜ接触場面研究の調査なのか：

ネウストプニーによって提唱された「接触場面」の概念と「接触場面研究」が日本語教育分野の研究に与えた影響

接触場面研究がどのように展開し、日本語教育に用いられたのかを知る



接触場面研究の意義と可能性を再確認

1. はじめに ネウストプニーの主張（1）

- 接触場面研究の必要性：

「学習者がどのように日本語を使っているかを研究することは、日本語教育の出発点である」

「学習者が参加している場面はすべて「外国人場面」（接触場面）であり、「母語場面」と異なる特徴を持っている。」

「「母語場面」を教育の目的としてきたのは現実的な態度とは言えない」

ネウストプニー(1981)

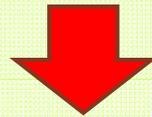
1. はじめに ネウストプニーの主張（2）

- 研究手法上の問題提起：

接触場面の談話の録音だけでは、不十分である。

産出物だけではなく、プロセスも研究の対象とすべきである。

表面には現れないが、すべての言語活動にともなう評価や回避などの調整も明らかにしなければならない。



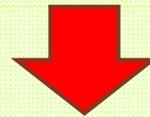
フォローアップインタビューにより**参加者の意識**を調査する必要がある

ネウストプニー(1981)

1. はじめに ネウストプニーの主張（3）

- 接触場面研究の日本語教育への活用方法（1）：

日本語教育のための接触場面研究の第一歩は、学習者がどのような場面で実際に日本語を使うかという、**接触場面のリスト**を作成することである。



- ・ 接触場面におけるコミュニケーション問題を調べる「地図」の役割を果たす。
- ・ 日本語のカリキュラムはこのような調査に基づくべきである。

ネウストプニー(1995)

1. はじめに ネウストプニーの主張（4）

- 接触場面研究の日本語教育への活用方法（2）：

学習者は自分のことばをモニターし、事前、事中、事後訂正を行うことによって、自分の能力を高めることができる。しかし、日本語の指導において、自分のことばをモニターし、訂正する練習、ドリル、指導が足りない



日本語の授業に「解釈」、「練習」のアクティビティーだけでなく、「**実際使用**」のアクティビティーも取り入れるべきである

ネウストプニー(1981, 1995)

2. 調査概要 (④接触場面研究)

- 調査対象論文：

モナッシュ大学に在籍し、研究活動を行ったことがある研究者の接触場面研究の論文

- 調査対象論文集例：

『日本語教育』

『世界の日本語教育』

“Journal of Asian Pacific Communication”

『接触場面と日本語教育

ーネウストプニーのインパクトー』

モナッシュ大学大学院修士論文の紹介記事

など

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

● データの種類による分類

A. さまざまな場面における自然会話データを調査・分析するもの

自然場面系

B. 教室における教師と学習者、学習者同士、学習者とビジターとの会話データを調査・分析するもの

教室場面系

C. タスク、インタビュー、ロールプレイなど、調査者によって設定された会話

実験場面系

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

自然場面系①

データの種類：（海外場面）

- ・パーティーにおける日本人とオーストラリア人の会話
- ・免税店での販売員と客の会話
- ・日系・合併企業のオフィスや工場における会話

分析の観点：

接触場面の実態、日本語学習者のインターアクションの問題を探る

研究結果の活用法：

- ・インターアクションの実態、学習者に求められていることを知り、日本語教育のための基盤を作る

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

自然場面系②

データの種類（日本場面）：

日本へ交換留学をした高校生のホームステイ
家族との様々な場面の会話の録音、帰国後のインタビュー

分析の観点：

ホストファミリーがどのように学習者のコミュニケーション能力のインプットとなったか

研究結果の活用法：

交換留学生の日本語習得を探る

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

自然場面系③

データの種類（海外場面）：
クラブ活動の観察、録音

分析の観点：

- ・日本語学習者と日本人がどのようなネットワーキングストラテジーを用いて交流の場を相互学習に役立てているか

研究結果の活用法：

学習リソースとネットワーキングの効果的な活用法をシラバスに取り込み、学習者の自律的な学習を支援する

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

自然場面系④

データの種類（日本場面）：

交流を目的とした活動における会話

分析の観点：

- ・ この活動をどのように捉えていたのか、参加の目的とその変容
- ・ 発話の頻度、発話の質
- ・ このような活動における会話の特徴

研究結果の活用法：

- ・ 留学生支援システムとしてのこのような活動の意義

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

自然場面系⑤

データの種類（海外場面）：
多言語職場における同僚の会話

分析の観点：

- ・ 会話上の交渉に着目し、何をどのように伝え合っているのかを分析
- ・ 多言語接触場面の特徴

研究結果の活用法：

- ・ 参加者の葛藤とその解決のためのストラテジーを明らかにすることによって、日本語話者が多様な接触場面に自信を持って参加できるようになる

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

教室場面系①

データの種類：

教室における教師と学習者のインターアクション

分析の観点：

- ・ 教師の教授ストラテジー
- ・ 教師のインターアクションの特徴
- ・ 教師と学習者の相互作用
- ・ 教師の規範と学習者の逸脱の管理

研究結果の活用法：

- ・ 教師が自己の授業行動を振り返る
- ・ 習得に効果的な教師ストラテジー
- ・ 授業の改善

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

教室場面系②

データの種類：

授業における「実際使用」アクティビティの会話
(ビジター・セッション、インタビュー活動、
電話タスクの会話等)

分析の観点：

- ・ 学習者のインターアクション能力
- ・ 学習者が使用するコミュニケーション・ストラテジー
- ・ 学習者の問題点は何であるか

研究結果の活用法：

- ・ コミュニケーション・ストラテジーの指導
- ・ 学習者ができない項目の指導
- ・ 学習者が自己のインターアクションを評価し、
習得に役立てる

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

実験場面系①

データの種類：

研究のために設定された接触場面の会話

分析の観点：

接触場面会話の実態・特徴を探る

例) フォリナー・トーク、訂正ネットワーク

研究結果の活用法：

- ・ 習得をシラバスや教材に役立てる
- ・ 多様な授業の形態を提案する

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

実験場面系②

データの種類：

研究のために設定された母語場面・接触場面の会話

分析の観点：

- ・ 母語場面と接触場面の比較
- ・ 接触場面の特徴、学習者のインターアクションの問題点
例) 敬語回避、依頼への断り

研究結果の活用法：

- ・ 学習者のインターアクションの問題点を指導

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

実験場面系③

データの種類：

研究のために設定された接触場面会話

分析の観点：

学習者のコミュニケーション・ストラテジー、
学習ストラテジー使用の実態を探る
例) 訂正、聞き返し、アクセント

研究結果の活用法：

- ・ コミュニケーション・ストラテジーを意識的に指導
⇒ 接触場面が体験できるプログラム作り
- ・ 授業活動の提案

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

実験場面系④

データの種類：

研究のために設定された接触場面会話

- ・ 留学後のインタビュー
- ・ 留学前のプレテスト、留学後のポストテスト
(ロールプレイ、インタビュー)

分析の観点：

- ・ 学習者のインターアクションの問題点
- ・ 留学前後のインターアクション能力の変化

研究結果の活用法：

- ・ 留学後日本語教育のコースデザインに役立てる
- ・ インターアクション能力（社会言語能力）の
フレームワークを作成する等

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (④接触場面研究)

実験場面系⑤

データの種類：

研究のために設定された接触場面の会話

分析の観点：

- ・ 接触場面はその類型によって、どう異なるのか
「相手言語接触場面」「第三者言語接触場面」
- ・ 第三者言語接触場面における規範とその管理

研究結果の活用法：

- ・ 日本語の言語的外来性を明らかにする

3. 会話データ分析を行う論文の分析 年代別傾向 (④接触場面研究)

1980年代前半

1980年代後半

1990年代前半

1990年代後半

2000年代前半

- ・ 実験場面系のデータ収集による接触場面研究が始まる
- ・ 接触場面と母語場面の違いを明らかにしようという研究
- ・ コミュニケーションストラテジーの研究の開始

3. 会話データ分析を行う論文の分析 年代別傾向 (④接触場面研究)

1980年代前半

1980年代後半

1990年代前半

1990年代後半

2000年代前半

- ・ 日系・合弁企業のオフィスや工場、免税店における接触場面の研究
- ・ 日本の経済的な影響を反映
- ・ モナッシュ大学でビジネス日本語コースが開設される (1990年に試行)

3. 会話データ分析を行う論文の分析 年代別傾向 (④接触場面研究)

1980年代前半

1980年代後半

1990年代前半

1990年代後半

2000年代前半

- ・モナッシュ大学で新しいコースができ、教科書“Interacting with the Japanese”が編纂される
- ・新しいコース（教科書）に組み込まれた「実際使用」アクティビティーが実践される
- ・学習者の「実際使用」アクティビティーにおけるインターアクションの研究が始まる

・留学先での接触場面の研究

・留学によってどのようなインターアクション能力が習得されるのか

3. 会話データ分析を行う論文の分析 年代別傾向 (④接触場面研究)

1980年代前半

- ・ 交流を目的とした場面やボランティア場面への広がり

1980年代後半

- ・ 「実際使用」アクティビティーが、教室外でのインタビュー活動や電話会話などへの広がり
- ・ 教室参加者の相互作用と教室文化、相互作用と習得の関係

1990年代前半

1990年代後半

- ・ 「多言語接触場面」や「第三者接触場面」など、多様な接触場面の研究へ
- ・ 接触場面における社会文化行動、接触場面におけるアカデミック・インターアクション、文字接触など会話データ分析の以外への広がり

2000年以降

4. まとめ・結論・提言

- 時代や地域のニーズに即した、多様な接触場面の研究が行われてきた。
- 接触場面の研究によって、学習者の言語、学習者が接する言語、学習者の言語使用の意識の実態が明らかにされてきた。
- これまでの研究成果をさらに活かす方法はないか。
- いま、それぞれの地域や現場のニーズに合った接触場面研究は、何であろうか。

【参考文献】

国際交流基金（2011）「日本語教育国・地域別情報 オーストラリア」

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/australia.html>

（2012年8月16日アクセス）

ネウストプニー, J.V. (1981) 外国人の日本語の実態(1)外国人場面 の研究と日本語教育『日本語教育』 第45号 30-40頁

ネウストプニー, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店

Neustupny, J. V. *et al.* (1992) “Interacting with the Japanese: A comprehensive communication course, book 1” Neustupny, J. V., Muraoka, H., and Spence-Brown, R. (eds.) Monash University. Clayton

Spence-Brown, R. (1991) Development of new courses at Monash University. *Proceedings, Seventh Biennial Conference, Japanese Studies Association of Australia* Australian National University, Canberra, 11-13 July 1991.